



TITLE:

# 共時と通時の問題に寄せて：プラグ学派とロシア・フォルマリズムとソシュールと

AUTHOR(S):

山口, 巖

---

CITATION:

山口, 巖. 共時と通時の問題に寄せて：プラグ学派とロシア・フォルマリズムとソシュールと. ことばの構造とことばの論理：山口巖教授停年記念論文集 1998: 574-602

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65798>

RIGHT:

## 共時と通時の問題に寄せて

— プラーク学派とロシア・フォルマリズムとソシュールと<sup>1</sup>—

### I. 共時と通時

§1 ソシュールは新しい言語観を明確な形で世に提示し、従来の歴史主義的な通時に対して共時の研究の重要性を説いた。彼は天文学や地質学の場合には、通時と共時の徹底した対立はないのに対し、言語学は経済科学と同じく対象を通時的に考察するか、あるいは共時的に研究するかに従って、「それぞれ固有の原理をもつ二部門にわかつたざるをえなくさせる」[20, p. 113]と説く。このように通時と共時とが峻別されるのは、偏に言語学が経済学と同じく価値を取り扱うからである。

「価値を扱う科学にとっては、この識別は実践的必然となり、あるばあいには絶対的必然となる。この領域においては、学者は二軸 (i.e. 共時の軸と通時の軸) を考慮しないでは、それじたいとしてみた価値の体系と、時間に即応してみたこのおなじ価値とを識別しないでは、その探究をげんみつに組織することなど、とうていできない相談で」[20, p. 113]あり、また「……言語は、その辞項の瞬間状態を離れてはなにものにも規定されることのない、純粹価値の体系」(ibid.)である、とソシュールは言う。

すなわち言語の辞項の有する価値は、同一の体系に属する他の諸辞項との対立によって得られるものであるから、「価値」という概念は必然的に体系の存在を予定する。そしてこのような価値を生じさせるような体系は、通時的なものではなく、共時的なものでなくてはならないのである。ソシュールは言語をチェスになぞらえて「第一に、競技の一状態は、一つの言語状態に相当する。こまのそれぞれの価値は、盤上におけるそれらの位置に依存する。おなじく言語にあっても、おのおのの辞項の価値は、他のすべての辞項との対立によって定まる」、「第二に、体系は瞬間的なものでしかない。それは位置ごとに変化する」[20, p. 124]と述べている。

§2 このように厳格に考えられた体系においては、その体系に属する辞項が一つ変化することによって新しい体系が生じると考えられる。これによって辞項間の関係が変化するからである。

「……一の均衡状態から他のそれへ、または — われわれの用語法にしたがえば — 一の共時態から他のそれへ移るには、こまを一つ動かしさえすればよい。一大騒動は起こらない。……それでありながら、その一手は体系ぜんたいにひびく；……それから生じる価値

<sup>1</sup>『立命館言語文化研究』第10巻1号 平成10年 1-33頁。

の変化は、その場しだいで、無であったり、はなはだ重大であったり、あるいはほどほどであったりしよう。なにがしかの手が勝負ぜんたいの形勢を一変せしめ、一時遊んでいたこまに結果を及ぼすことさえある」(op. cit., p. 124)

とソシュールは言う。

ここからソシュールは次のように結論づける。

変遷はけっして体系の全面の上ではなく、その要素のいずれかの上におこなわれるものであるから、それはこれを離れて研究するほかはない。もちろんどの変遷も体系に反撃を及ぼさないことはないが、初発事実は一点の上のみ生じたのである；それは、それから出て総体にいたる帰結とは、なんの内的関係をもたない。このような継起辞項と共存辞項とのあいだの、部分的事実と体系にふれる事実とのあいだの、本性の相違は、両者を唯一科学の資料とすることを禁じるのである (op. cit., p. 122)。

通時言語学は、これに反して、同一の集団意識によって知覚されず、かつたがいのあいだに体系を形づくることなくつぎつぎと置きかわる継起的辞項をむすぶところの関係を、研究するであろう (op. cit., p. 139)。

§3 ソシュールが通時的研究に対して共時態の研究の重要性を説いたのは、すでに述べた通りである。これは19世紀の歴史主義に対するアンチ・テーゼであったが、このことによって彼は20世紀の言語学に新たな視点を提供し、後の構造主義への道を拓いたのである。ソシュール自身の言葉を引用すれば、「通時論的なものと共時論的なものとの対立は、あらゆる点に現われる。たとえば、……それらには同等の重要性がない。この点からすれば、共時論的部面のほうが他を抑えていることは明らかである。話す大衆にとっては、これこそ真正・唯一の实在だからである。」(op. cit., p. 126)

一方「通時論的眺望のうちに身をおくときは、かれがみとめるものはもはや言語ではなくて、それを変更する一連の事件である」(op. cit., p. 126)に過ぎない。

よくひとは、ある与えられた状態の発生を知ることほど大切なものはない、と断定する；それはある意味では正しい。その状態を形成した条件は、その真の性質を明らかにしてみせ、ある種の妄想からわれわれを防いでくれるからである；しかしこのことはまさに、通時態がそれじたいのうちに目的をもたないことを、証するものにほかならない (op. cit., p. 126)。

従ってソシュールにとっては、通時態の研究は共時態をよりよく理解するためのものの以上のものでなかったということになる。

## II. ラングとパロール

§4 更に心的部分についてみれば、遂行的側面はこれに関与しない。その理由は「遂行が大衆によってなされることは絶対にないからである；それはつねに個人的なものであり、個人はつねにその主である」(op. cit., p. 26)からに外ならない。このような個人的な遂行をソシュールはパロール parole と呼んだ。小林氏が「言」と訳出したものである。

このような分析に基づいてソシュールはラング *langue* (言語) を

「言の運用によって、同一社会にぞくする話手たちのうちに貯蔵された財宝であり、各人の脳のうちに、より精密に言えば、一団の個人の脳のうちに、陰在的に存する文法体系である」(op. cit., p. 26)

と定義する。これを要するに、言語活動はコミュニケーションの手段として社会的なものでなくてはならないから、そこには大衆の存在が予定されていなければならないことになる。しかしその遂行的側面に限って言えば、これが大衆によって行われることはなく、常に個人的なものでなければならぬ。パロールである。一方大衆はこのような個人的なパロールの媒介によって各人の脳髓の中に貯蔵された、潜在的な体系を所有する。これがラングである。これは遂行的なものでないことによって、専ら受容的のものということになる。このようにして言語は言語活動の中の一カ所、すなわち聴取された映像が概念と連合する場所に局在するとされ、またこれが一種の社会的平均であることにより、言語活動の社会的部分であると定義されることになる (op. cit., p. 27 参照)。このような考え方にフランスの社会心理学者デュルケム E. Durkheim (1858-1917) の影響がみられることは、夙に指摘されていることであるが、『講義』においては要するに言語 (ラング) は「言語能力の社会的所産であり、同時にこの能力の行使を個人に許すべく社会団体の採用した必要な制約の総体で」(op. cit., p. 21) あり、そして言 (パロール) はこのような言語 (ラング) の個人的遂行であると把握されるのである。ラングがこのような社会的なものであり、「個人の外にある」實在だとするならば、これは異質なものを含む言語活動 (ランゲージ) はもとより、ラングの個人的な遂行として時と場合によってさまざまな異なりを示すパロールとは異なった等質性を有し、従って「他と切りはなして研究の対象となりうるもの」であるということになる。

### III. ソシュールの功績

§5 ソシュールの『講義』にみられる彼の学説に対する疑問や批判は、これまで様々になされてきたが、それにも関わらず彼が従来余り明確でなかった種々の概念を明確にしこれを定義したことは、否定することのできない大きな功績であり、これがその後の言語学の発展にほとんど革命的とも言うべき深刻な影響を及ぼしたのは、歴然たる事実である。

既に述べたように彼は通時と共時の区別を明らかにし、共時の研究に優先的地位を与えた。

第二に彼は言語に関わる現象の中にラングに属するものとパロールに属するもの、ならびに言語活動に属するものを区別し、言語学の固有の対象をラングに属するものとしたが、同時に彼はパロールを固有の対象とする言語学の可能性をも示唆した。ソシュールの弟子のシャルル・バイイが後に展開した文体論研究は、少なくとも彼の主観においては、師によって示唆されたこのパロールの言語学の実践に外ならなかったとみることができる。

更にソシュールの功に帰せられるものとして、ラングが一つの体系であるという彼の主

張である。ソシュール以前には彼ほどの明確さを持ってこのことを主張したものはいなかった。言語がぬきさしならない一つの体系であるというのは今日考えられるほどには自明のことではなかったのである。

#### IV. ソシュールの『講義』の問題点

§6 ソシュールが『講義』の中で、共時と通時を峻別したのは、既に見た通りである。

その際に述べたように、ソシュールは言語をチェスにたとえたが、そこで彼は両者の類似を次の三つの点に要約している。

第一に、競技の一状態は、一つの言語状態に相当する。こまのそれぞれの価値は、盤上におけるそれらの位置に依存する；おなじく言語にあっても、おのおのの辞項の価値は、他のすべての辞項との対立によって定まる。

第二に、体系は瞬間的なものでしかない；それは位置（場面？ — I. Y.）ごとに変化する……さいごに、一の均衡状態から他のそれへ、または — われわれの用語法にしたがえば — 一の共時態から他のそれへ移るには、こまを一つ動かしさえすればよい；一大騒動はおこらない (*op. cit.*, p. 124)。

ここから明らかなのは、言語を体系として把握するためには、時間を捨象しなければならないということである。何故なら

「言語は、そのあらゆる部分が共時的連帯のうちで考察されうる、またされねばならない体系である」 (*op. cit.*, p. 122)

からに外ならない。

§7 しかしながら言語は疑いなく一つの歴史的所産であるから、このように通時と共時を峻別することによって、果して言語の本質をあきらかにできるであろうか、という疑問が生じて来るのも、自然であろう。

『講義』のソシュールに従う限り、言語は専ら静的な体系としてのみ把握され、その変化はそれ自身体系性を有しない事件として観察される。それにもかかわらず経験は言語が一つの力動的な体系であり、却ってその動きの中に言語の本質が潜んでいることを、我々に予感させる。

ソシュールの弟子であるシャルル・パイイは、言語を変化させようとする力と、これに抗しようとする力の拮抗した、一時的な平衡状態にあると考えることによって、両者の対立を統一しようと試みた。

何よりもまず言語は絶えず変化しているが、機能することは変化しないことによってのみ可能である。自己の存在の任意の瞬間において言語は一時的な平衡の産物である。従ってこの平衡は二つの相反する力の等しい働きである。一方は変化を抑制する伝統であり、これは言語の正常な使用と相容れないものである。他方はこの言語を一定の方向に変化させようとする、積極的な傾向である<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 『一般言語学とフランス言語学』[1]。

この考えは言語を力動的な体系であると考え、これを可能にするが、なお、バイイの「言語は絶えず変化しているが、機能することは変化しないことによってのみ可能である」といういわゆる「言語学的二律背反」*antinomie linguistique* は如何ともすることができず、これに理論的な解決を与えたことにはなっていない。力動的体系はそれ自身絶えず「振動」してはいるが、それにも拘らず一つの平衡状態である限り、それは依然として共時的なものである。従ってここで含意されているような通時的なものとの関係は解決されないままに終わっていると言わざるを得ないのである。しかしバイイのこの主張は、問題の所在を明確にし、それに一步近付いたと言う点で評価されるべきであると考えられる。

§8 最近の資料によれば、ソシュールは必ずしも共時と通時を宥和しがたいものとして分離してしまったわけではなかったことが知られる。即ち

「ポップに始まる言語学が確立され実践される以前の言語理論家たちは、言語をチェスの駒の位置のように見做し続けた。……チェスには打ちがあることを発見した歴史文法学者たちは、彼らの先駆者たちを馬鹿にして、今度は一連の打ちしか認めず、そこにこそゲームの完全な展望があると主張して駒の位置などは気にもかけないようである。……さて、この二つの誤謬のうちいずれがその結果においてより危険度が大きいかを言うのは難しいが、我々は、そのいずれにも、片時といえど組するものではない。我々は、言語とチェスを比較できるとしたら、それは同時に位置と打ちから成立する、つまり同時に変化と状態から成る完全な意味でのチェスゲームでしかない」と確信している」<sup>3</sup>

とソシュールは言っているのである。

この断章を『講義』と比較すれば、『講義』のチェスのたとえは断章に言う「二つの誤謬」の中の最初のものに外ならない、ということになる。ソシュールが考えていたのは「同時に位置と打ちから成立する、つまり同時に変化と状態からなる完全な意味でのチェスゲーム」なのであり、いわば共時と通時の統合であったと思われる。

しかしながらそのような共時と通時は理論的にはどのようにして統合されるのかという点については、ソシュールは何も語っていない。「歴史をはらんだ共時」という考え方に到達するのは、プラーグ学派の出現まで待たねばならなかったのである。

## V. ラングとパロール

§9 ところで共時と通時の関係という問題は、実は一見したところ全く異なったもう一つの問題と深くかわり合っている。ラングとパロールの区別である。

ラングとは結局のところ個々人の脳髄に存在し印象の総和の形をなして集団のうちに存在するところのものであり、パロールはその個人的な遂行実現に外ならないとされる。『講義』によれば、「それゆえ言のなかには集団的なものはひとつもない。その現れは個人的であり瞬間的である」[20, p. 34]とされているのである。

<sup>3</sup>手稿10、断章番号3297 [22, p. 107].

パロールはこのような、いわば不安定なものであって、これを対象として研究することは、可能であってもきわめて難しいものとならざるを得ない。少なくとも『講義』のソシュールはそう考えていたようである。『講義』において

「しだいによつては、これら二つの学科のそれぞれに、言語学の名前を据えおき、言の言語学といつていえないこともない。しかしこれと、言語をその独自の対象とするほんらいの言語学とを、混同してはならないであろう」(ibid.)

と述べられているのも、この故であろう。

§10 このように理解するならば、ラングはいわば潜在的な可能性の体系であり、パロールは特殊な場合におけるその顕現である。

## VI. セシエの修正

§11 ソシュールの弟子であるアルベール・セシエは、

「言語学の思想を一新させた20年間の張りつめた努力の後に感じない訳にはいかぬのは、ソシュールの労作がはるか以前に古くなってしまった青年文法学派において支配的であった考え方と、その基礎において結びついていることであつた」<sup>4</sup>

という認識に基づいて、師の学説の修正を行った。彼はこの中でパロールに共時と通時の媒介者としての位置を認め、次のように主張している。

「パロール」における僅少な変化の総計こそが、目立ちもしないが時には深い変化を言語構造の中に惹起する。従つてパロールはそれが一定の言語状態に基礎を置いているが故に、共時態にも、またパロールが既にあらゆる可能な変化の萌芽を含んでいるが故に、通時態にも、同時に関係を有するのであり、かくして生じた新たな言語状態もまた、「機能しつつ発展を続ける」のである(cf. [15, p. 62])。

パロールがこのように共時と通時を媒介するとすれば、パロールの現象を通時に解消してしまうことができないのは当然である。パロールの現象を通時に解消しようという傾向はソシュールを含めた青年文法学派に通有のものであり、これがソシュールをしてパロールの軽視へと導いたのである、とセシエは考えているようである。彼は次のように言う。

現在まで相変わらず流布し、青年文法学派に遡る誤りを指摘する必要がある。それはパロールの言語学が言語史に登録された諸事実との関連においてのみ研究されているという点にある。従つてパロールの言語学と関連するものは実際には通時にのみ込まれているのである[15, p. 72]。

まさにこのような実践のために、その本質から何よりも言語の機能を、即ち組織されたパロール parole organisée の学の領域に属するものの多くが言語史に属せしめられている。ソシュールすらも『講義』においてこの根の深い誤りを免れなかったのである(ibid.)。

§12 このようなことが生じたのは何故であろうか。セシエによればこれはソシュールがラングとパロールの相互依存性を説きながら、ラングがパロールに依存するものであるこ

<sup>4</sup> 「ソシュールの三つの言語学」[15, p. 60][8]。

とを認めなかったことに起因するということになる。そのためにパロールには従属的な位置しか与えられないことになり、専らラングにのみかわる通時に吸収されてしまうか、共時において無視されてしまうことになる。

フェルディナン・ド・ソシュールは、この問題に答えて、＜ラングとパロールは互いに相互依存、即ち相互規定性という関係を持つ二つの対象である。ラングはパロールが自己の役割を遂行するのに不可欠であり、パロールはラングが存在するのに不可欠である。後者は前者の道具であると同時に所産である＞と言っている。

この最後の主張は疑いもなく正しい。しかし我々には相互規定性という単純化された概念で満足する訳にはいかないと思われる。ソシュールは彼の理論に固有の二つの特徴のために、ここで誤りを犯した。ラングに中心のかつ支配的な位置を与えたことである。このことはラングが従属的なものであると彼が考えることを妨げた。彼自身が承知していたあらゆる論拠にもかかわらず、彼はラングがパロールに依存していると結論する決心がつかなかった[15, p. 62]。

しかしながら

「実際にはパロールは論理的に、またしばしば実践的にも、ソシュールの用語の意味でのラングに先立っている」のであって、「あらゆる表現行為、あらゆるコミュニケーションは、それがどのように産出されたものであっても、パロールの行為である」[15, p. 63]

とセシエは言っている。

§13 ところでこのようなパロールは動物の叫びと異なって、コミュニケーションに用いられるから、社会的な側面を持たないわけにはいかない。少なくともセシエはそう考えているようである。

「言語の起源の秘密をさぐろうとしなくても、その根底には常に我々の心理的物理的性質によって与えられる、自然な表現手段があることが分かる。……人間の言語活動（ランゲージュ）はこの現象の社会化され、従って大きく変化した形式である」(ibid.)

と彼は言う。

パロールはそのためには組織された形態を持たなければならない。

「パロールはより明確で有効であろうとすれば、パロール自身が創り出したラングの法則によって多少とも組織される」(ibid.)

のである。

一方「パロールは何かある自然発生的で生きたものを持っており」、それがパロールの本質であるから、これはパロールの中の平均的なものをコード化したラングよりも含むところが大きい(ibid.)。

「パロールのこの自然発生的性と＜生命力＞は文法規則の発達により覆いかくされることもあり得る。このような場合にはこれはラングの働きの結果にすぎないと思われることもあり得るが、それにもかかわらずパロールは常にもっと大きなものである」(ibid.)

とセシエは言う。



§14 もしそうとするならば、ソシュールの『講義』の説明から受ける印象とは異なって、パロールは、ラングの枠内においてのみ実現するものでないことになる。逆に言えばパロールはラングの枠内にとどまらないことによって、理論的に共時と通時の媒介者となり得るのである。

「ラングがパロールによって産み出されるとすれば、パロールはいかなる瞬間においても完全にはラングによって産み出されることができない。それらの間には相互依存の関係は存在しない」(ibid.)

とセシエは言っている。ところでパロールは、地域的に異なる場合もあれば社会階級層によって異なる場合もある。同一の家族の間でも厳密には同じではあり得ない。それは表現手段としてコミュニケーションに支障を来さない程度の安定性を保っているに過ぎないのである。

安定の原理は言語の具体的現実には根ざしてはいない。相対的安定は言語活動に十分な安定を保証しようとする無意識の集団的思考によって説明される。コミュニケーションの過程において言語的慣習の体系が余りにも大きすぎる無秩序に至ることを妨げる力が常に生じる。このような極めて有効な力が存在するという、まさにそのことによって、話者の集団の実際的必要という点からみて十分な組織と安定が認められるのである[15, pp. 65-66]。

§15 既に述べたようにラングがパロールによって産み出されるとするならば、ラングにもこのような相対的安定という性格は反映しないではおかないであろう。

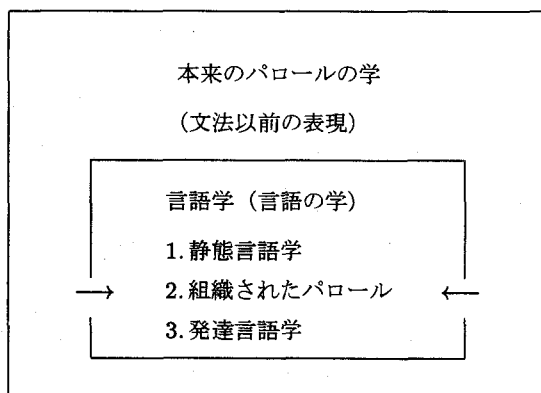
一方このようなパロールの中に生じた一つの事実が、何等かの内的あるいは外的な原因によって比較的固定した現れを示すようになるとそれがラングに反映し、通時的変化をもたらすことになる。

かくして組織されたパロールは共時と通時の媒介者となるのであり、その故に組織されたパロールの学はラングの二つの学、即ち共時言語学と通時言語学を結ぶ、かなめの位置を獲得するのである。ところでこの組織されたパロールの多様性が由来するのは、偏にそれが言語集団の日常に関わっているからである。そしてその言語集団の日常は、パロールによって自己の意図を他者に伝えることにある。言語活動には従って意図性が内在している。即ちプラーグ学派のいうところの機能である。したがってこの意味での「機能」とは、言語活動に本来的に内在するものであると、いわなければならない。ここからセシエの図式が生じる(図表参照)。

「ここでこれを構成する三分科は、パロールの言語学ではなく(これはそれ自身独立の分科をなす)、組織されたパロールの言語学、すなわち人間の社会の生活の条件における言語の機能を研究する分科によって相互に結びつけられている」([15, p. 64], cf. [8])

というのである。

セシエはソシュールに従ってラングとパロールの区別はなお維持しているように見えるが、このような機能的な立場には、プラーグ学派の学説の影響が色濃くにじみでているように思われる。



セシエの図式

§16 一方最近の資料によれば、パロールとラング、共時と通時の宥和しがたい対立と言うのは、必ずしもソシュールの真意ではなかったと思われる記録がある。

すなわちソシュールは

「人が語るためには、ラングの宝庫が常に必要であるというのも事実であるが、それとは逆に、ラングに入るものはすべてまずパロールにおいて何回も試みられ、その結果、持続可能な刻印を産み出すまでくりかえされたものである。ラングとはパロールによって喚起されたものの容認に過ぎない……ディスクールの要請によって口にされるすべてのもの、そして個別の操作によって表現されるものはすべてパロールである。個人の頭脳に含まれるすべて、耳に入り自らも実践した形態とその意味の寄託、これがラングである。

この二つの領域のうち、パロールの領域はより社会的であり、もう一方はより完全に個人的なものである。ラングは個人の貯蔵庫である。ラングに入るものは、換言すれば頭に入るものはすべて、個人的なものである」<sup>5</sup>

と述べているのである。

ここではパロールとラングの関係は、さきに述べたセシエの論文と趣旨において概ね一致している。

ところでこのソシュールの言説の最後の部分、即ちパロールの領域がより社会的であるのに対し、ラングの領域は個人的なものであるとする主張は、極めて興味深い。『講義』においてパロールは「それはつねに個人的なものであり、個人はつねにその主である」[20, p. 26]として個人的なものとして主張され、他方「言語を言から切りはなすことによって、同時に1. 社会的なものを、個人的なものから、2. 本質的なものを、副次的であり、多かれ少なかれ偶然的なものから、切りはなす」(ibid.)としてラングは社会的なものと考えら

<sup>5</sup>断章番号 2560-2522 [22, pp. 273-274].

れるのである。

§17 この一見全く相矛盾する主張はどのように解すべきであろうか。私見によればこの「断片」にみられるのは、ラングとパロールの存在形式に関するものであるように思われる。そうすることによってこれらの相反する主張は矛盾なく説明することができると考えられる。

即ちラングはその性質においては社会的なものであるが存在の形式においては個人的もしくは心理的なものであるとするのである。これに対してパロールは逆にその性質においては個人的なものであるが、存在の形式においては社会的なものであると考えられるのである。

## VII. ランガーシュ

§18 『講義』においてソシュールは「言語活動には個人的側面と社会的側面とがあり、一をのぞいて他を考えることはできない」[20, p. 20]と述べ、また別の箇所では「言語はわれわれにしたがえば、言語活動から言を差し引いたものである」(*op. cit.*, p. 110)としている。

また彼は「言語研究のとるべき合理的形式」として

$$\text{言語活動} \left\{ \begin{array}{l} \text{言語} \\ \text{言} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{共時態} \\ \text{通時態} \end{array} \right.$$

という図式を提示している(*op. cit.*, p. 137)。

これらの言説から見る限り、ソシュールは個人的側面としてのパロールと、社会的側面としてのラングを併せたものをランガーシュ「言語活動」としているに過ぎないように見える。

これに対して近年発見された「手稿」によれば、ランガーシュはこのように消極的なものではなく、もっと積極的なものとして考えられていたことが知られる。

たとえば彼は次のように言っている。

[1828] ランガーシュが思考に対してもつ特有の役割というものは、その音的、または物質的手段となることではなく、思考と音の仲介的場を創ることであって、その結果[未分節の]思考と音は否応なしに個別の単位を形成する。

[1829] もともとカオス的な性格をもつ思考は、それがランガーシュによって単位へと分解され、配分されるが故に、明確なものとならざるを得ないわけである。

[1830] 次のようなことははっきりと否定せねばならない。つまり、有用な音素である音によって、思考が物質化されるなどと考えるべきではない。これは、思考=音なる存在が生み出す分割こそ言語学の究極的単位であるという、一種、神秘的な事象なのである。音と思考は、これらの単位によってしか結びつくことはできない。

[1831] 二つの無定形な塊の譬えとして、水と空気を考えてみよう。気圧が変れば、水の表面は一連の単位へと分解される。これが波である。これは空気と水の間中に介在する連鎖であって実質を形成しはしない。この波動が二つの結合を表し、言ってみれば、思考と、それ自体は無定形な音の連鎖との合体を表している。二つの組み合わせが、一つの形相（フォルム）を生み出すのである<sup>6</sup>。

§19 すなわちランガージュというのは「思考と音の仲介的な立場」を創る働きである。従って思考あるいは音の何れも、ア・プリオリに分割されているということはない。ランガージュによってはじめて無定形な思考と連続的な音とが同時に分割され、ラングの単位を創り出すのである。

ソシュールの表現によればこれは

[1824]「次のようなものは存在しない。a) 他の諸観念に対して、あらかじめ出来上っていて、まったく別物であるような観念。b) このような観念に対応する記号（シーニュ）。そうではなくて、言語記号が登場する以前の思考には、何一つとして明瞭に識別されるものはない。これが重要な点である」<sup>7</sup>

ということになる。

上述の断片は[1831]に見える波の比喻によれば、ランガージュにあたるのは気圧の変動であるということになる。そして波は実質たる空気と水の境界にあり、両者から産み出される形式なのである。

このような文脈においてのみ、「言語は形態であって、実体ではない」[20, p. 171]というソシュールの言がよく理解できるのである。そしてこれはヘルダーの波の比喻と奇妙に一致するばかりでなく、カッシーラーが要約したフンボルトの所説とその基本においてさほど異なったものとは考えられない。

## VIII. ロシア・フォルマリズム

§20 ロシア・フォルマリズムは1910年代の半ばから1920年代の終り頃まで(1914-1930)、通称「オポヤス」に拠って活動した一群の人々についていわれるものである。オポヤス ОПОЯЗ (ОРОУАЗ) は「詩言語研究協会」Общество изучения поэтического языка とでも訳される団体であって、代表的なメンバーとしては、ポリヴァーノフ Евгений Дмитриевич Поливанов (1891-1938)、トウニャーノフ Юрий Николаевич Тынянов (1894-1943)、シクロフスキー Виктор Борисович Шкловский (1893-1984)、エイヘンバウム Борис Михайлович Эйхенбаум (1886-1959)、ヤコブソン Роман Осипович Якобсон (1896-1982)、ヤクビンスキー Лев Петрович Якубинский (1892-1945) 等が、有名である。

<sup>6</sup>断章番号 1828-1831 [21, pp. 43-44]。

<sup>7</sup>断章番号 1824 [21, pp. 40-42]。

フォルマリストの主張を手短に要約すると、少なくともその初期においては、彼らの主張は、文学を含む芸術作品はそれ自体固有の価値を持っているのであるから、対象に固有の方法によって研究されなければならない、というところにあると思われる。エイヘンバウムは『「形式主義的方法」の理論』において、

文芸学の固有な特徴を定め、それを具体化することが、形式主義的方法を組織するための根本問題であった。……フォルマリストが否定したか、あるいは否定しつつあるのは、方法ではなく、多種多様な学問や多種多様な学問上の問題の無原則的な混合である。フォルマリストの根本的な主張は、文芸学そのものの対象は、他のすべてと区別されるような、文学素材固有の特性でなければならないという点にあったし、今もってそれは変わらない。……それを最も明瞭に表現したのが、R・ヤコブソン(『最も新しいロシアの詩 — 素描一』プラハ、一九二一年、十一頁)であった [23, pp. 224-225]。

と述べ、ヤコブソンを引用している。ヤコブソンはその引用の直前において、次のように述べている。

造形芸術が、自覚的表現のための自立した価値をもつ素材の定型であり、音楽が、自立した価値をもつ音の素材の定型であり、舞踏が、自立した価値をもつ素材、つまり、身振りの定型であるとすれば、詩は、自立した価値をもつ、《それ自体に集中した》語の、形式化である。

詩とは美的(エステティッシュ)な機能を果たす言語である [19, p. 21]。

§21 すなわちヤコブソンはこの時期、詩を造形芸術、音楽、舞踊などと同じく自立した価値をもつものであるとし、その自律性を強調していると見られる。

エイヘンバウムは更に次のように述べている。

この文学研究の特性弁別原則を、思弁的な美学を援用することなく、実際に実現し、強化するためには、存在する無限に多様な系のうちから、文学の系と共通点は持ちながらも、機能において区別されるような系を選択して、それを文学の系と比較対照する必要があった。そのような方法論(メトード)に基いた方法(プリヨーム)として現われたのが、「オボヤーズ」の最初の論文集において論究され(Л. Яковинскийの論文)、詩学の根本問題に取り組むフォルマリストの活動の出発点となった、「詩的」言語と「日常」言語との対比であった。普通、文学研究家は文化史や社会史、心理学や美学などの方向に研究を位置づけるのに対して、フォルマリストは、研究材料においては詩学と共通しているが、それを取扱う際の目標と課題を異にする学問たる言語学の方向に自分の研究を位置づけた。一方、言語学者の方でも、日常言語と対比される時に暴露される詩的言語の事実が、言語事実一般として、純粋に言語学の問題の範囲内で考察されうる限り、形式主義的方法に関心を抱いた。そこに生じたのは、例えば、物理学と化学との間に存在する、相互利用と区分の關係に類する關係である。

……

詩的言語と日常言語の一般的な形での対比は、ヤコビンスキーの最初の論文『詩のことは音について』(『詩的言語論集』ペテルブルク、一九一六年)において行われ、その差異は次のように定義された。「言語現象は、話し手が個々の場合に言語表象を用いる目的の観点から分類されなければならない。話し手が純粋に実際上の伝達を目的としてそれを用いているなら、われわれは日常言語(言語による思考)の体系と関係しているのであり、そこでは、

言語表象(音、形態的な部分等)は独立した価値を持たず、伝達手段としてのみ現われる。しかし、実際の目的が後景に退き(まったく消えてしまうわけではないにしても)言語表象自体が自立した価値を獲得するような、別の言語体系も考えられる(実際に存在し得る)」[23, pp. 225-226], [17, p. 163]。

ヤクビンスキーは、上に引用された箇所直後において、次のように述べている。

現代の言語学はほとんど専ら実用的な言語を問題にしている。しかし他の諸体系の研究もまた、極めて重要である。この短い論文において私は詩の創作に際して詩人が持つところの言語体系の心理音声 психофонетика のいくつかの特徴を指摘することを試みる。私はこの体系を仮に詩言語 стихотворный язык (言語的思惟 языковое мышление)と呼ぶことにする。

実用的な言語的思惟においては話し手の注意は音声には集中されない。音声は、伝達の手段として役立つばかりで、意識の明るい場に浮かび出ることはなく、独立した価値を持たない。

……詩言語においては、状況は異なる。詩言語においてはことばの音は意識の明るい場に浮かび出て、注意がそれに集中される [18, pp. 163-164]。

§22 これらのことから、ヤクビンスキーは詩言語の特徴として音声的側面のみに注意が集中することを考えているかのようであるが、決してそうではなかった。このことは彼の次のような言葉からも窺うことができる。

上で指摘したように、詩言語にとって特徴的なのは音声に対する情緒的關係である。一定の音声及び音声結合によって惹起される情緒は、「満足 — 不満」、「興奮 — 平静」、「緊張 — 安らぎ」のように、さまざまな方向へ向かう可能性がある。全く明らかなように、音声によって惹起された情緒は詩の「内容」によって惹起された情緒と反対の方向に向かつてはならない(し、逆も真である)。そしてもしもそうであるならば、詩の「内容」とその音声的組立は互いに情緒的な依存関係にある。

従って、詩人は何らかの意味で彼にとって価値のある形象に、情緒的に適合する音声及び音声結合を選び、逆に与えられた状況の中で、何らかの意味で重要な音声及び音声結合に適合する形象を選ぶのである。

詩の音声的及び意味的側面の間の依存関係という、かなり初歩的な考えは、詩における「形式」と「内容」の統一という、(特に現在見られる)詩人たちの多くの発言に対して、一定の理論的基礎を与えるように、思われる (op. cit., p. 170)。

明らかなように、ここでは詩言語の特徴として、音声的側面への注意の集中が挙げられ、それと内容との統一が説かれているが、なお詩作品を全体として記号として扱おうとはしていない。

§23 ヤクビンスキーの研究が当時のフォルマリスト達にとってどのような意義を持っていたかは、シクロフスキーがヤクビンスキーの論文について、次のような評価を与えていることから察せられる。

詩的言語のなかには流音の異化法則が存在せず、詩的言語には発音しにくい類似した音の

結合も許容されることを実証したヤクビンスキーの論文(『詩的言語理論叢書』一号)は、詩的言語の法則が実用的な言語の法則に対立する……ということを示した、学問的批判に耐えうる最初の試みであった(『詩的言語理論叢書』二号)[26, p. 13]。

ヤクビンスキーは彼の研究の結果、次のように結論づける。

なぜ同類の流音の重積が実用言語で容認できないものであるのかは理解できる。……実用言語では音声はそれ自身に話し手の注意を集中させない。従って同類の流音の重積は発音を遅め(吃ることさえある)、通常の話のテンポを破壊し、そのことによって話し手の注意を自然にことばの音声面に集中するから、実用言語では容認できないのである。

流音の重積は実用言語に最も高い程度に本来的であるオートマティズムを破壊する。……[18, p. 177]

……

……従って単語の実用的価値が後景に退き、音声形式がそれ自身価値あるものであって、音声遊戯の要素をもつ場合には、流音の異化は生じない。ここでは注意は音声に集中し、それ故に流音の重積は容認でき、しばしば望ましいのである[18, p. 179]。

§24 実用言語に本来的に存在するオートマティズムを破壊するということに、詩の言語の特性を見ようとする、ヤクビンスキーのこの考えは、シクロフスキーによって言語芸術乃至は芸術一般の特性に普遍化された。

「……もし、多くの人々の複雑な全生活が無意識のうちに過ごされたとするなら、その生活は存在しなかったのと同じことであろう。」(レフ・トルストイの1897年2月29日の日記のメモ)

……

それだからこそ、生の感覚を回復し、事物を意識せんがために、石を石らしくするために、芸術と名づけられるものが存在するのだ。知ることとしてではなしに見ることとして事物に感覚を与えることが芸術の目的であり、日常的に見慣れた事物を奇異なものとして表現する《非日常化》の方法が芸術の方法であり、そして知覚過程が芸術そのものの目的であるからには、その過程をできるかぎり長びかせねばならぬがゆえに、知覚の困難さと、時間的な長さを増大する難解な形式の方法が芸術の方法であり、芸術は事物の行動を体験する仕方であって、芸術のなかにつくりだされたものが重要なのではないということになるのである[26, pp. 15-16]。

上述したようなフォルマリストの主張によれば、言語、特に実用的な言語は、絶えず自動化し、そのために「事物」が意識から覆い隠されてしまうために、これを非日常化するという営為が芸術に必要であると説かれている。もしそうであるならば、どのような非日常化した表現であっても、それはすぐに自動化するわけであるから、非日常化という行為は「日常的に」行われなければならないということになる。一方非日常化は日常化という概念と対になっているものであるから、日常化した表現を背景にしないでは成立し得ないものであることも確かである。

§25 もしもそうであるとすれば、このことから得られる論理的帰結には二つのことが存

在するといえよう。その一つは規範と実現の問題である。日常化し、従って自動化することとは、それが何らかの意味で規範化することである。逆に非日常化が意味するところのものは、日常化したものを非日常的な方法によって実現し、そのことによって表現に「生」の感覚を与えることであるといえる。すくなくともシクロフスキーはそう考えていたようである。

しかしこの場合、日常化と非日常的なものの、言い換えればラングとパロールの関係はどのように理解されるのだろうか。シクロフスキーは「短編小説と長編小説の構造」において、次のように述べている。

わたしはここで簡単に断わっておきたいのだが、文学的伝統といっても、ある作家がほかの作家から借用するようなものが文学的伝統であるとは考えていない。わたしは、作家の伝統というものを、共通する文学的規範の総体、つまり、発明家の伝統と同じように、その時代の技術を持つ可能性の総和から成立しているものに依存するものと考えている[26, p. 133]。

§26 もしそうとするならば、問題はそのような規範をどう実現するか、ということに帰着することにならざるをえないであろう。しかし非日常性を実現するために、既に規範化された技法を用いるとして、その実現の結果が芸術作品であると認められるのは何によってであろうか。また絶えず非日常化を繰り返す過程の中で、過去のある時代に成立した芸術作品が、今日でも芸術作品であると認められるのは何によってであろうか。疑問の残るところである。シュトリーター Jurij Striedter は、文学作品を非日常化を実現するさまざまな技法の集合体であるとする時期を、ロシア・フォルマリズムの第一期であるとしているが、これまで見てきたものはおよそこの時期に当たると思われる。

すなわち、

文芸学は特に文学を文学たらしめるものに専念すべきであるという前提の結果として、非日常化 defamiliarization という概念及びそれから派生する発達という考えの両方が厳格に文学内部の現象であると理解されている。……自動化 automatization と非日常化の間の不断のシーソー遊びが、文学の発達の原理となる。……この初期の発達の考え方に対して、文学外のパクターをラディカルに総て除外すること、文学の発達の系列をすべての他の社会的な系列とその発達から孤立させることになり、容認しがたい。文学の内部においても、この理論は連続の相ではなく、革新の相を説明するに過ぎないことになる、などという異議が提起されるかもしれない(実際にすぐに提起されたのであるが)。

……したがって一般的な非日常化の技法を指摘し、その上に文芸学の理論を立てることだけでは不十分である。それに加えて示されなければならないのは、条件が異なればどうして同じ技法が、(特定の効果によって非日常化の技法になったり、ならなかったりすることによって) 異なった効果をもたらすのか、ということである。文学の技法を非定型化 deformation であるとする一般的・機能的な定義を拡張して、これらの技法を構成 construction のファクターであると認め、それによって具体的な作品の構造の記述を特殊な機能をもった要素と技法の組織化されたものに拡張すべきであった。技法に中心をおく第一期の考え方は、機能的体系としての作品に中心をおく第二期に道を譲ったのである[9, p. 95 & seq.]。



さらにシュトリーターは第二期について、次のように述べている。

第二期 (phase 2) は文学作品を特殊な機能をもって連結された諸要素と構成的な諸技法の体系であると考えて記述するから、その作品を記述するためには文学的伝統と発達を参照しなければならない。特定の要素乃至技法が特定の効果を獲得し、特定の美的体系において特定の機能を果たすかどうか、またそれはどのようにしてかを決定するためには、それらが伝統によって予めどのように定められているか、それらが既に特定の固定した機能を割り当てられているかどうか、そしてそれはどのようにしてか、あるいは約束がそれらを完全に自動的なものとして、もはやいかなる芸術的效果をも持たないようなものにしているかどうか、をまず決定しなければならない。機能と形式的要素との関係は、伝統の内部で変化する発達の関係 an evolutionary relation であるから<sup>1</sup>、形式的要素に対する特定の機能の割り当て及びその逆は、文学の発達を参照することによってのみ決定できる。……著者は彼の作品によって一定の意図を実現しようと望んで、その意図に適した特定の機能を果たすことのできる要素と技法を要求する。この点に関して彼は伝統から独立しているが、それは彼が伝統がもっている配列のなかから選び出し、彼が選び出した要素と技法を、それがそのときの伝統において用いられているように用いようとするかどうか、あるいはそれから逸脱するかそれを対立させ、非日常化するかどうかを決定できるという限りにおいてである。しかし何れにしても個々の選ばれた要素及びそのすべての使用の仕方が、その伝統的な使用と関連している限り、彼は伝統、すなわち文学の発達の状態に依存しているのである。その限りにおいて、「自立的機能 autofunction、すなわち他の体系及び他の系列の一連の類似の諸要素に対する要素の相関関係が……統合的機能 synfunction、(すなわち所与の具体的な作品における)その要素の構成的機能、の条件なのである。」<sup>2</sup> [9, p. 97]

ここで肩付きの数字のある箇所は原文では脚注になっており、トウニャーノフ Юрий Николаевич Тынянов (1894-1943) の「文学の進化」[24, pp. 104-130]からの引用であることが示されている。

§27 これらの言説から判断する限りでは、シュトリーターは第一期について述べたような問題点を、文学作品が特殊な機能をもって連結された諸要素と構成的な諸技法の体系であると考えることによって解決しようとしたのが、第二期であると考えているようである。そして彼はトウニャーノフをこの第二期を代表する理論家に擬しているように思われる。そうとすれば、シュトリーターのいうロシア・フォルマリズムの第二期は、第一期の自然な発展であるように見える。しかしソシュール(『講義』のソシュール)的な言語学の観点からこれを仔細に見れば、両者はその取扱っている対象そのものが異なっていると考えないわけにはいかない。すなわち、第一期はその内包する論理的矛盾にもかかわらず、問題としているところは、規範に対する実現の問題に、焦点が当てられていたという点にあることができる。規範からの逸脱、乃至は非日常化というのが、すぐれて実現の問題だからである。これを言換えれば、この時期には専らパロールに当たる現象が問題とされていたことができる。

第一期に当たる1924年に雑誌『レフ』に発表した論文「文学的事象」[24, pp. 71-103]に

において、トゥイニャーノフは次のように述べている。

文学が言葉の構成として感じられることが自明の理のように思われるにいたったことははっきりしているが、それはつまり、文学はダイナミックな言葉の構成にほかならないのである。

不断の動態の要求は進化を惹き起こす。なぜならば、ダイナミックな体系の一つ一つが自己運動を展開し、対立をはらんだ構成の原理が弁証法的に現われてくるからである (op. cit., pp. 83-84)。

§28 一方、トゥイニャーノフも、シクロフスキーと同じく、文学作品の「文学性」ないし「芸術性」を、日常化＝自動化に対する非日常化の裡に見ていると思われる。

新しい構成のあらゆる本質は、古い技法を新しく利用することのなかに、新しい構成の意味のなかに存在しうる……[24, p. 80]

シクロフスキーの項において述べたように、このような「非日常化」はその必然として変化を予定する。彼は

文学的事象はさまざまな構成分子の集合であり、その意味で、文学は絶え間ない進化の系列なのである [24, p. 101]。

という。

彼はまた、次のようにもいう。

…この進化の交替という重要な事象の前には、複雑な過程が先行しているのである。

まず最初に、対立する構成原理が現われる。それは「偶然的」な結果や「偶然的」な逸脱、誤謬に基礎を置いて出現するのである。たとえば、小さな形式(叙情詩におけるソネットや四行詩など)が支配的であるときに、ソネットや四行詩などを詩集として自由に統一することは、きわめて「偶然的」な結果となろう。

しかし、この小さな形式が自動化してゆくとき、この偶然的な結果は技法として強化され、詩集そのものが、技法として、構成として意識されるようになり、そこでつまり、大きな形式が発生するのである。

……

これとは反対に、大きな形式の「偶然的」な結果の一つとなるものとして、技法として、構成の方法として、未完成で断片的な感じを与えることが挙げられるが、これは直接的に小さい形式に導くものである。しかし、この「未完成」で「断片的」なものが、誤謬として、体系からの脱落として認識されるのは明らかなことであって、体系そのものが自動化しはじめることになってはじめて、その体系を背景にして、この誤謬が新しい構成原理として浮かびあがってくるのである。

だが実を言うと、標準的な詩学に照らしてみても、あらゆる畸形、あらゆる「誤謬」、あらゆる「変則」も、新しい構成原理なのである(とりわけ、意味論的な転位的手段として、言語上の不注意や誤謬を未来主義者たちが利用したことはその例である) [24, pp. 87-88]。

これを音素のレヴェルにたとえて見れば、古い規範は音素に、向自的な原理は異音に、またそれに先行する彷徨変異は個人的な発音の偏位に当たるといえよう。

それと同時に、個人的な偏位、トゥイニャーノフのいうところの「あらゆる畸形」、あら

ゆる「誤謬」と「変則」もまた、「新しい構成原理」として、いいかえれば芸術作品として、意味を持ちうるのである。

したがって芸術作品は、作品それ自身としてではなく、常に既存の規範乃至構成原理との関連で評価されなければならないということにならざるをえない。ここには既にして通時が含まれている。

§29 明らかなように、通時と共時の関係については、ここでも通時に大きな重点がかかり、共時に属するのは個々の作品しかないという意味で、共時は極端に矮小化される。この点では彼はシクロフスキーとさほど距たってはいないように見える。

ではなぜ、共時が極端に矮小化され、これに属するのはただ一つの作品にとどまるのであろうか。筆者の考えるところによれば、これは、作品がその本質において、パロールの性質を持っているからである。パロールは、通時をはらんだ体系に属するものとして、その体系を背景にしてはじめて出現しうが、同時にそれは一回きりの現象でしかない。上述したトゥィニャーノフの「文学的事象」における言説は、彼が意識したかどうかには関わりなく、すべてパロールの色彩を帯びている。

この点に関して興味のあるのは、トゥィニャーノフがジャンルに関して、次のように述べていることである。

……今日、文学的事象であるものも、明日には、単純な日常生活的事象となり、文学から消えてゆくかもしれない。字謎などはわれわれにとって子供の遊びになっているが、カラムジンの時代には、それは言葉の瑣事や技法の遊びを強調する文学ジャンルであった。そしてここでは、単に文学の境界線、文学の「辺境」、文学の限界領域だけが流れているのではなく、そうではなくて、まさに「中心」が問題なのであって、つまり、文学の中心においては太古から受け継がれてきた一つの流れが移動し、進化し、ただ新しい現象が脇のほうにたまっているのだというのではなく、そうではなくて、これらの新しい現象がまさしく中心の位置を占め、中心は辺境に移転するのである。

あるジャンルの崩壊期には、ジャンルは中心から辺境に移動し、二流の文学や、裏庭や低地などから新しい現象が中心に浮かび出てきて、これまでそのジャンルの占めていた場所を占拠する(これがヴィクトル・シクロフスキーの言う「若いジャンルの規範化」の現象である)。こんなふうにして、冒険小説は通俗小説となったのであるし、そしていま、心理小説が通俗小説になりつつあるのである[24, pp. 76-77]。

プラーグ学派のいう中心と周辺概念が既にここに明確な形で見られることは、注目に値しよう。そしてプラーグ学派の主張するこの概念は、後に見るように通時と共時を媒介するものとして、ソシュールの『講義』というパロールに属している。

これに対して同じくトゥィニャーノフの論文「文学の進化」が書かれたのは、1929年、すなわちプラーグ学派のテーゼが発表された年であり、トゥィニャーノフとヤコブソンの連名による「文学研究・言語研究の諸問題」が発表された翌年に当たる。これらを比べてみれば、両者の思想的関係は、人的関係と同じく、きわめて密接である。

## IX. プラーク学派

§30 それではプラーク学派のいう機能主義的立場とはどのようなものであろうか。マテジウスはヴィルヘルム・フォン・フンボルトについて

「言語の分析はもの（エルゴン）ではなく、働き（エネルゲイア）を分析することであるという思想は言語における機能の意義を彼が理解することを容易にしたが、同時に彼を誤らせて心理的立場の過大評価に導いた」（マテジウス「言語学の現状」[4, p. 41]）

と述べ、更にボドゥエン・デ・クルテネについて

「ヤン・ボドゥエン・デ・クルテネの言語学の業績に見出される驚くべき豊富な思想の中で、機能という考えが著しい役割を持っている。ボドゥエンは所与の言語において音声があり、その生理的性格とは等しくない役割を強調し、音韻の概念を作り出したが、これは現代の言語学の基礎に属するものである。しかし彼は心理学の誤った光に眩惑され、またことばが常に変化するという現実を重視し過ぎたので、自己の先駆的な考えから言語学の方法と言語学の体系のためのすべての結果を導き出すことができなかった」（*op. cit.*, p. 43）

としている。

一方ソシュールについては

「ボドゥエンが見過ごしたものをフェルディナン・ド・ソシュールは明瞭に認識した」

として

「……ド・ソシュールの二つの基本的な思想、言語の共時的分析の要求と言語が体系であり構造であるという考えは、ボドゥエンがド・ソシュール以前に既に表明していた言語の機能という考えと共に新しい言語学の構築のための基本的な支点に外ならない」（*ibid.*）

と主張している。

このことから機能的立場がフンボルトからボドゥエン・デ・クルテネを経てプラーク学派に受け継がれたことが知られる。また言語の構造的な性格という考え方をソシュールから受け継ぐことによってプラーク学派は、自己の立場を機能的構造主義と規定したのである。

「ボドゥエン・デ・クルテネとフェルディナン・ド・ソシュールの思想に基づいた機能的及び構造主義的立場は言語学の未来のために極めて豊かな基礎を与える、現在ただ一つの考えなのである」（*op. cit.*, pp. 43-44）

とマテジウスは言っている。

§31 トルンカ及びヴァヘクの手になる「プラーク構造主義言語学」という論文には

「プラーク言語学団の他のメンバー（V.マテジウスその他）は、社会の伝達と表現の必要を満足させるために奉仕し、新たな必要に応ずるために変化できる体系としての言語の機能的役割を強調した」[12, p. 39]

と述べられている。

またヴァヘクは

「……しかしながらプラーク学派においては新しい言語へのアプローチのもう一つの重要な特徴が作り上げられた。即ち機能、言語的表出の目的の考慮である。それは言語が自己の表出をそれが追求する目的に従い、それが発せられる状況に従って形式的に適切に区別す

ることができるという目的のために、所与の言語がどの相互に区別された手段を所有しているかを検証することである」[13, p. 306]

と言う。

§32 すなわちブラーグ学派の言う機能的立場とは、言語の体系及びその体系を作る要素が、話者が相手に伝達し、あるいは自己の考えを表現しようとする目的に、どのように適合しているかという立場から言語の現象を考えようというものだということになる。

たとえばいま [a] という音声のみを持つ言語があると仮定する。そうすればこの言語を所有している人は森羅萬象を [a] という音声によって表現する以外にはない。この場合には聞き手にとっては話し手が何を表現し、伝達しようとしているかを的確に知ることはむずかしいであろう。しかしもしこれに [i] という音が加わったとする。そうすればどの領域の現象を [a] によって表現し、どの領域の現象を [i] によって表現するかは、おのずから定まるから、聞き手にとって話者の意図はより分かり易いものとなるであろう。同様に [u] が加わり、[o]、[e] がそれぞれ加われば、その可能性ははるかに大きなものとなる。このようにして母音の体系が生じる。更に子音にも体系が生じてくる。

§33 このように考えれば、体系乃至構造というものは言語による適切な表現を支え、保証するものだということになるであろう。従って逆に体系を観察する時には、それが言語による表現をどのように支え、保証しようとしているかという観点からなされなければならないことになる。そうとすればここで重要なものとして言語による表現をもたらしところのもの即ち話者の表現乃至伝達の要求が浮かび上がって来る。マテジウスが

「あらゆる人類に共通な表現及び伝達の一般的要求は、その上に言語毎に異なる表現と伝達の手段を置くことのできる唯一の共通分母である。これらの原則に基づく言語分析は最終的に同一言語の共存する諸現象間の相互の因果関係を確認することを目指さなければならない」<sup>8</sup>

と述べているのも、このことに外ならない。これを機能的立場というとするれば、機能的立場は言語を常にそれを担う主体への考慮の下に考察することになる。言語は主体を離れて存在する単なる抽象的な体系ではないのである。TCLP の第1巻の冒頭に掲げられたテーゼは、1929年にプラハで開かれた第一回国際スラヴィスト会議に提出されたものであるが、このテーゼの第一章「体系として言語をとらえることから生じる方法の諸問題とこの考え方のスラヴ諸語に対する重要性」の a)「機能的体系として言語をとらえること」即ちこのテーゼの冒頭は、

「人間の活動の所産として言語はこの活動と目的性という性格を共有している。言語活動を表現あるいは伝達として分析する場合、話者の意図は、最も容易に示される、最も自然な説明である。同じように言語分析において機能の立場がとられなければならない。この観点

<sup>8</sup> 「体系的文法分析について」[7, pp. 157-158]。

からすれば、＜言語はある目的に適合させられた表現手段の体系である＞。いかなる言語事実も、それが属している体系を考慮しないでは理解できない」[10, p. 7]

となっている。

以上述べて来たことから、テーゼのこの文章がプラーグ学派の機能的立場を極めて簡潔に、しかも核心を外すことなく表現したものであることが会得されよう。

§34 『講義』のソシュールは言語を専ら静的な体系として把握し、その変化をそれ自身体系性を持たない偶発的な事件と考えた。

これに対して彼の弟子のシャルル・バイイは言語を変化させる力とこれに抗しようとする力の拮抗した、一時的な平衡状態にあるものとすることによって、共時と通時の宥和しがたい対立を統一しようと試みた。これは既に述べたように言語を力動的な体系であると考えを可能にするものであったが、なお共時と通時を媒介するメカニズムを明らかにするものではなかった。

ソシュールの真意は共時と通時を必ずしも宥和しがたいものとするのではなく、相補的なものと考えていたらしいことが断章からうかがわれる。

「我々は言語とチェスを比較できるとしたら、それは同時に位置と打ちから成立する、つまり同時に変化と状態から成る完全な意味でのチェスゲームでしかないと確信している」(断章番号 155 [22] 参照)

とソシュールは言っている。

ここから彼が少なくとも通時的変化を単なる偶発的な事件にすぎないと考えていたのではないことが、明らかとなる。チェスの打ちが決して偶発的なものではなく、勝つための系統的なものだからである。従ってこれはバイイの述べているものより一歩進んだ見解というべきである。

トルンカが通時にも構造をみとめようとしているのも、上述したバイイの考えと、断章にみえるソシュールの考えの発展の延長上にあるものと考えることができる。すなわち

中立化、非音韻化などのような機能の喪失のすべてのあとに言語には必ず一定の機能の代償 — たとえその代償が量的なものであれ、質的なものであれ、あるいはその両方であれ — が生じ、またその逆も真である……所与の言語の(例えば音韻体系の)真に構造的な歴史は階層的に排列された、一つ一つは等しくはないが一定時間の機能の持続を持つ機能の、複雑な働きの全体を示さねばならない[11, p. 61]。

§35 しかし通時的現象に構造をみとめたとしても、それによって通時と共時の対立が宥和されることにはならないであろう。この点でトルンカ及びヴァヘクが次のように述べているのは、興味を惹く。すなわち、

プラーグの言語学者はその活動のそもそものはじめからソシュールの理論に反して言語が共時的観点からのみならず、通時的な側面においても「すべてが張り合っている」体系であることを強調した。事実、言語はその歴史的発展のいかなる段階においても体系であること

を止めることはない。時間が間断なくそのすべてのレベル及びそのすべての構成要素に作用するからである[12, p. 35]。

即ち体系のすべての要素に時間が間断なく作用するという形で通時は共時の中に包摂されると考えるのである。しかしその包摂の具体的な仕方乃至メカニズムについては、なお明らかではなかった。これについてはさまざまな模索がなされたと思われる。

## X. 潜在性の理論

§36 それではその包摂の仕方についての模索は、具体的にどのようなものであったろうか。マテジウスは「共時的分析の要求とことばの不断の変化との間の矛盾を私は1911年言語現象の潜在性に関する理論によって解決しようと試みた。これは実際には言語体系の諸事実とそのことばにおける種々な実現についての構造言語学の学説の先駆となるものであった」[5, p. 25]と述べている。これは明らかに先に述べたクルテネの所説の発展であった。

マテジウスがここで潜在性 *potencialnost* といっているのは、共時的な体系における「ゆれ」のことである。このゆれは方言や階層にみられるような、社会の内部において個人間にみられるものと、個人の内部でみられるものがあるが、何れにしてもこのゆれには一定の範囲が存在するという。

英語の音声の長さは今日では静態的に動揺し、潜在的であること、またそれでもその動揺は、個々の音声の場合異なった動き方をすること、またこの動揺の範囲内で、具体的な個々の例は、統計的方法によって見出すことのできる一定の線に沿って、常に配置されることが、言える(*op. cit.*, p. 13)。

§37 しかしマテジウスは、この潜在性の理論が、どのようにして言語の通時と共時の対立を解決しうるものである、と考えたのであろうか。彼は論文の中で、このことについて明示的な形では何も語ってはいない。しかし上述した例をみれば、音素（このばあいには母音）がその実現において必ずしも長さが一様ではないこと、それにもかかわらず音素及びその音素の環境によっておのずから長さには一定の枠があることが主張されており、また既に述べたように、言語現象の潜在性という理論が、「言語体系の諸事実とそのことばにおける種々な実現についての」理論の先駆をなすという、マテジウス自身の言葉とを考え合わせれば、明確な理論化は行われていないものの、マテジウスがここで扱っていたのは、実は、セシエのいう「組織されたパロール」の問題であったと考えてもよいように思われる。この組織されたパロールによって言語の通時と共時が媒介されるとするのである。そうとすれば、この論文は1911年に既に現在に至るこの問題の議論を先取りしていたことになるが、通時と共時の媒介の具体的なメカニズムに関しては、当然ながら未だ明確にはされていなかったというべきであろう。

## XI. 中心と周縁

§38 トルンカは次のように述べている。

体験することなくして機械と異なる、階層的に配列された記号の体系としての言語は機能しない。時間におけるその動的な動きを可能にするところの、互いに強め合い、代替し合う能力をその要素が持たないだろうからである。(個人的ならびに集団的な事実である) 体験の理論によって、これまで我々の理解できなかった言語の若干の側面が特に明確に説明される。

言語の体験は自己の空間において中央と周縁で異なった深さを持つという認識に達する。ある要素は体験されたものの周縁にあり、より深く体験され、したがって独自の言語的な流れをなして単純に機能する全体と感じられる要素からへだたっていると感じられる [11, p. 65]。

これがいわゆる中心と周縁の問題である。マテジウスのいわゆる潜在性によって、言語現象が一定の幅をもったものであり、いわば各要素がその幅の中で絶えず振動していることが示された。したがって言語は絶えず振動する要素から成る体系であるということになる。このような要素には言語の担い手の個人的集団的な体験の深さによって、即ち言語主体との関連において、中心的なものと周縁的なものととの区別が存在することになる。したがってこれはソシユールのラングに属する現象ではなく、組織されたパロールの現象でなくてはならない。ソシユールの意味でのラングの単位ならば、それが心的なものである限り、離散的なものでなければならぬと、考えられるからである。

§39 このような中心と周縁という概念と言語の変化との関係については、例えばダネシ František Daneš とヴァヘクが次のように述べている。

ブラークグループのメンバー達があれこれの言語の所与の状態の共時的分析に常に組織的な努力を行って来たとしても、彼等はもちろんラテン語のようなく死語>やエスペラントのような人工語ではない、いかなる生きている言語も常に動いており動態 *state of flux* にある、という事実を決して見失ったことはなかった。

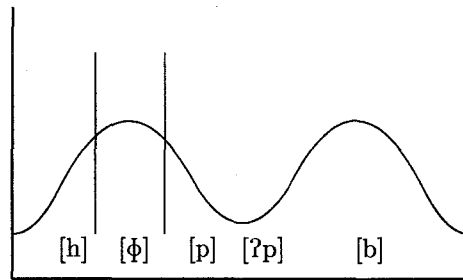
この事実は重要な結果を導く。すなわちいかなる言語もその発展のすべての瞬間において消滅の状態にある要素、及び逆に今生じたばかりの他の要素を当然持っていると言うことである。言いかえればどのような言語も常に一種の改造 *reshuffling* を経験するのであって、それが外から見ればその言語構造のある種の欠陥に見えるのである。言いかえれば、ここで再び出会うのは、体系の「ぼやけた点」 *fuzzy point* ともいうべきものであり、それはその体系のその後の発展の段階で除去されるかも知れない(しかし必ず除去されるとは限らない) [3, p. 25]。

上に述べた「ぼやけた点」は疑いなくそれらの言語体系の構造に属しているが、それは明らかに後者の周縁に置かれており、従ってそれらの体系における位置は決して特にしっかりしたものとは言えない (*op. cit.*, p. 25)。

§40 これらのことを体系的に説明すれば、およそ次のようなことになるであろう。言語は既に述べたように、一定の幅の中で絶えず振動している要素からなる体系であって、しかもその要素は、中心と周縁からなっている。これは例えて言えば山脈の中の一つ一つの山のようなものである。頂上をとりまく所はその山の中心であるが、やがて連続的に麓に



移行し、次の山の麓に移行する。その場合どこからが各々のに属するかは必ずしもはっきりとはしない。連続だからである。



しかし周縁にある異音、例えば [Φ] が必ず中心に属する異音 [p] を代替する、というものではない。いわば生物における彷徨変異のように、一時的に現れ、やがて消滅するものも有りうる。

「……上述の考え（すなわち中心と周縁の考え）は言語発達の動態を説明する際に重要でありまた有用であると思われる……同じく言語発達のユニヴァーサルとして位置づけることができるとと思われるのは、周縁的現象が中心に属するものより不安定だという事実である（その結果としてあるいは周縁的要素が完全に消滅するか、あるいはいくらかの修正によって中心に移行することを可能にする）」[2, p. 11]

とダネシは言っている。

§41 マテジウスが言語現象の潜在性という概念によって共時と通時の対立を統一できたと考えたのも、このようなことであったに違いない。ヴァヘクとトルンカが「事実言語はその歴史的発展のいかなる段階においても体系であることを止めることはない。時間が間断なくそのすべてのレベル及びそのすべての構成要素に作用するからである」[6] という時、それはこのような時間の作用を考えていたと思われるのである。

従来の言語理論が明確に説明できなかった共時と通時の対立をこのような形で理論づけたのは、プラーグ学派の大きな寄与であると考えられ、またここで用いられた中心と周縁という概念の有用さも、ここで強く印象づけられることになる。

ここでは通時と共時はパロールによって媒介され、個々の単位が中心と周縁から成ることによって、共時は常に通時を孕んだものとして現象することが明らかにされたのである。プラーグ学派のこの問題に関する所説は、ソシュールの理論の強い呪縛の存在のもとで、ラングの存在そのものの否定にまでは至らなかったが、周縁と中心の存在は、理念的な、従って離散的な単位としてのラングにおいては生じ得ないものであると考えられるから、「言語」の単位となるのは、社会的に形成される一定の規範、言い換えれば「組織されたパロール」でなくてはならないと思われる。

しかし乍ら言語の周縁にあるものたとえそれが新たに発生したものであるにしても、すべて中心に移ることはない。してみれば周縁にあるものが中心に移行するメカニズムがど

のようなものか、は改めて問われなければならない。そして何よりも何をもって中心とし、周縁とするかについて、明確な理論づけがなされなければならないであろう。戦後出版された *TLP* の第2巻が「言語体系の中心と周縁の諸問題」という特集になっているのも、まさにこのような問題意識の然らしむところであったと思われるのである。

§42 最近、ジヴォフとティンバーレイクの連名で「構造主義と分かれるに当たって」という論文が、「討議資料」という形で発表されたが [14]、その冒頭の部分において、次のように述べられている。

### 1. 言語の体系性と発達

言語をすべての要素が互いに相関している一つの体系とする通常考えは、任意の変化が体系全体の変化であることを前提にしている。したがって、言語が共時において機能するという考えは、言語が発展するという考えに、直接に反映している。言語をこのように考えるのは、通常ソシュールおよび彼の追随者達の名前と結びついているが、この点についてソシュールと青年文法学派との相違は余り大きいものではない。どちらの場合も、言語は集団的な意識の中に、プラグマティックスから相対的に独立した、抽象的な体系の形で存在するところの、有機的な統一体であると見なされる。青年文法学派は、プラグマティックスを言語発展における個別的な外乱であると見なし、ソシュールは言語のすべての要素が完全な相互依存関係にあり、そこでは各々の要素が専ら他のすべての要素との関係によって規定されると述べることによって、この線をドグマの形で完成させたにすぎない。このような考えは、一つの平衡状態 [equilibrium] が、なぜ絶えず他の平衡状態に作り替えられるかが明らかでない限り、矛盾することになる。あるいは我々は言語に進歩があるという、全く評判を落す考えを信奉しているのか、あるいは余り意味のない一般的な目的論を言語に付与していることになる。この目的論に従えば、言語は常に何かある理想的に作られた状態を目指すが決してこの状態に到達することはなく、逆にあるパラメータについてはそれに近づくとしても、同時に別のパラメータに関してはそこから遠ざかるのである。

### 2. ラングとパロール: 体系の抽象化

この矛盾は、言語についての我々の考察における抽象化のレベルが誤っていることによって生じるのであり、結局は同じくソシュールに帰せられる、言語 (*langue*) と言 (*parole*) の二分法に遡る。ソシュールは、彼が観察する言語活動に君臨しているカオスを逃れようとして、この二分法を主張した。*la langue* は *la parole* を断罪して、ソシュールの見方からすれば、全体としてのパロール、および特に個人的なパロールの振舞いを特徴づける変異性と不規則性に対して、勝利を収めた。この目的のために、ラングはパロールの乱脈さをもたない抽象的な体系であると、前提された。しかしながら、これはそれ自身すべての問題を解決するものではなかった。抽象的な体系というものの自体が、カオスから逃れれば、形而上学に帰着するからである。言語 (*la langue*) は形而上学的な性質のものであることになり、このことによって、「科学的」な史的言語学 — それはライブニッツ、ヴォルフおよびアーデルングの形而上学に自己を対置していた — が最初の第一歩から厭わしいものと思っていた、まさにその状態に、文献学を返らしめることになるのである。まさにこのことによって、カオスからの逃亡は、形而上学からの逃亡と矛盾を来すことになる。

ソシュール(および彼の後の世代)は、この問題の解決を、言語が体系であることとこの体系が社会的な性質を持つことを示すことに見出した。言語活動(usage/parole)は、理念的な担い手の意識の中に存在する言語(langue)が、不完全に(歪曲されて)反映したものであるとして扱われた。そしてこの理念的な担い手は集団的で無意識な担い手と同一視された。これら二つの互いに結びついた手法が、(社会学におけるデュルケムと同じく)ソシュールをして言語におけるカオスから逃れ、それと同時に形而上学を言語の社会的性質にすり替えることによって、実証主義的な推論を保持することを可能にさせたのである。しかし社会性は、社会的な約束と理解される言語記号の恣意的な性格に帰せられる。社会性は(新)プラトン主義の直感的(形而上学的、実体論的)な言語理解に対する、外的(理性論的)な属性としてこれに帰属させられた。それは実際には意識が体系的であるという形而上学的な考えを近代化させた合理化である。言語活動はこの場合、影の世界、直観像による現実の反映の世界に属するのであって、この現実においては何物も変化させることはない。

これらの前提がどれほど明らかに疑わしいものであっても、これらはその後の言語学によって受け入れられ、半世紀以上にわたって主導的な構造主義のパラダイムを作ってきたのである。この成功は理解できる。このようなアプローチは言語を「自然」の一部として扱うことを可能にし、言語学を文字通りの Naturwissenschaft [自然科学] ではなくとも、Geistwissenschaften [精神諸科学] を Naturwissenschaften [自然諸科学] と結びつける一種の橋に変えたのである。このことが(たとえ不均等であったにせよ)言語活動の体系的な諸相を分離し、それらを自己完結的な全体として研究することを可能にしたのである。このような研究は実り多いものであり、多様であり、展望のあるものであった。そして言語活動に関する我々の知識の本質的な部分はまさに構造主義的な研究の結果得られたものである。構造主義が不十分なものであり、限界があり、教条主義的であることは、学問的意識において少しずつ明らかになってきたのであり、このプロセスも決して完結したと考えることはできない。

### 3. 体系性とプラグマティックス

ソシュールの(構造主義的)アプローチの場合には言語の社会的および文化的な次元は実際には無視されており、しかもそれは二つの面が無視されてきたのである。一方では言語をすべての担い手の集団的無意識に属する抽象的な体系として構築することによって、このアプローチは、担い手が様々な社会的グループに所属していること、特に社会的役割にしたがって言語行動が変化することに表されるように、彼らのアイデンティティーが複数存在すること、彼らが異なった文化的伝統を信奉していること、などによって条件付けられる多様性を捨象する。他方、言語活動の相互作用的、ディアローグ的な性質、そのプラグマティックスの側面、およびそれと共にこれと結びついており、その定義そのものにおいて話し手と聞き手の区別を前提としている諸現象も、同じように矮小化される。ソシュールの伝統に見られるラングは静的であり、その故にこのような考え方の枠内では、時間におけるコミュニケーションの状況の展開を示すような、ラングの構造的特徴を記述できる可能性はない。これに属するものは代名詞、(推論的カテゴリーとしての)アスペクト、時制など、即ちすべてのシフター・カテゴリー<sup>9</sup>であるから、社会的性格をソシュールの理解するかぎり、ラングは肉ばかりでなく、骨格をも持たない幻想であることがわかる[14]。

<sup>9</sup> категории-шифтеры、発話行為、特に話し手と聞き手との伝達上の結びつきを示す要素を内容とするカテゴリー(Лингвистический энциклопедический словарь, М. 1990 p. 271)。

全体としてこの「テーゼ」には聊か性急なところがあり、必ずしも全面的に承服できるものではないが、ここでははっきりソシュールのラングとパロールの二分法に対する否定的見解が述べられていることは、注目してよい。今後の論議の展開が俟たれるところである。

#### 関係文献

- [1] Charles Bally.  
*Linguistique générale et linguistique française*, Bern, 1950.
- [2] František Daneš.  
The Relation of Center and Periphery as a Language Universal, *TLP*, Vol.2, 1966.
- [3] František Daneš-Josef Vachek.  
Prague Studies in Structural Grammar Today, *TLP*, Vol.1, 1966.
- [4] Vilém Mathesius.  
Kam jsem dospěli v jazykozpytu, *Jazyk, kultura a slovesnost*, Praha, 1982.
- [5] Vilém Mathesius.  
Deset let Pražského lingvistického kroužku, *SaS*, 1936, No.3.
- [6] Vilém Mathesius.  
O potenciálnosti jevů jazykových, *Jazyk, kultura a slovesnost*, Praha, 1982.
- [7] Vilém Mathesius.  
O soustavném rozboru grammatickém, *Čeština a obecný jazykozpyt*, Praha, 1947.
- [8] Albert Séchehaye (1870–1946).  
*Les trois linguistiques sausuriennes*, <*Vox Romanica*>, Vol.5, 1940.
- [9] Jurij Striedter.  
*Literary structure, evolution, and value, Russian formalism and Czech structuralism reconsidered*, Harvard Univ. Press, London, 1989.
- [10] Cercle Linguistique de Prague.  
*Thèses, Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, Vol.1, 1929.
- [11] Bohumil Trnka.  
Obecné otázky strukturálního jazykozpytu. *SaS*, Roč. IX, 1943.

- [12] Bohumil Trnka, Josef Vachek.  
Prague structural linguistics, *Philologica Pragensia*, 1958, 1-2.
- [13] Josef Vachek.  
Slovo a slovesnost jako tribuna pražské školy jazykovědné v letech 1936-1943, *SaS*, 1965, No.4.
- [14] В. М. Живов, Аллан Тимберлейк.  
*Вопросы языкознания* Москва 1997, 3, pp. 3-14.
- [15] В. А. Звегинцев.  
В. А. Звегинцев, *История языкознания XIX-XX веков в очерках и извлечениях*, ч. II, М., 1965.
- [16] Виктор Борисович Шкловский.  
*О теории Прозы*, Москва, 1925.
- [17] Лев Петрович Якубинский.  
О звуках стихотворного языка, *Избранные работы, Язык и его функционирование*, Москва, 1986, pp. 163-176.
- [18] Лев Петрович Якубинский.  
Скопление одиноковых плавных в практическом и поэтическом языках, *Избранные работы, Язык и его функционирование*, Москва, 1986, pp. 176-182.
- [19] 北岡誠司  
ロマン・ヤコブソン著、北岡誠司訳「最も新しいロシアの詩 — 素描 —」『ロシア・フォルマリズム文学論集』I せりか書房 1984, pp. 7-193.
- [20] 小林英夫  
フェルディナン・ド・ソシュール著 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店 1972.
- [21] 丸山圭三郎  
『ソシュールを読む』(岩波セミナーブックス) 岩波書店 1983.
- [22] 丸山圭三郎  
『ソシュールの思想』岩波書店 1981.
- [23] 水野忠夫編  
『ロシア・フォルマリズム文学論集』I せりか書房 1984.
- [24] 水野忠夫編  
『ロシア・フォルマリズム文学論集』II せりか書房 1982.

[25] 水野忠夫訳

V. シクロフスキー著、水野忠夫訳『散文の理論』 せりか書房 1983.

[26] 水野忠夫訳

V. シクロフスキー著、水野忠夫訳『散文の理論』 せりか書房 1983.